

第47回江戸川乱歩賞受賞作

# 13階段

Kazuaki Takano

高野和明

第47回江戸川乱歩賞受賞作

# 13階段

高野和明

Kazuaki Takano

講談社

**高野和明** (たかの・かずあき)

1964年東京都生まれ。'85年より、映画・TV・Vシネマの撮影現場でメイキング演出やスチルカメラマンなどを担当。映画監督・岡本喜八氏の門下に入る。'89年渡米。ABCネットワークの番組にスタッフとして参加。ロサンゼルス・シティカレッジで映画演出・撮影・編集を学ぶ。'91年同校中退後、帰国して映画・テレビなどの脚本家となる。

N.D.C 913 351p 20cm

13階段

じゅうさんかいだん

二〇〇一年八月六日第一刷発行  
二〇〇三年二月二十四日第十八刷発行

著者

たかの かずあき  
高野和明

発行者

野間佐和子

発行所

株式会社講談社

東京都文京区音羽一丁目二二番一〜二、八〇〇一  
電話 (〇三) 五三九五―三五〇五(編集部)  
(〇三) 五三九五―三五六二(販売部)  
(〇三) 五三九五―三六一五(業務部)

印刷所

豊国印刷株式会社

製本所

黒柳製本株式会社



定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社書籍業務部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。本書の無断複写(コピー)は著作権法上の例外を除き、禁じられています。

©Kazunaki Takano 2001 Printed in Japan

ISBN4-06-210856-9



## 著者の言葉

高野和明

五歳の時、母が夜な夜な物語る怪談話に取り憑かれました。

七歳の時からハリウッド映画に夢中になりました。

そして気がついてみると、多くの書物に記された犯罪や冒険の物語に耽溺していました。

私を魅了した文芸や映画は、芸術ではなく娯楽でした。その世界にどっぷりと浸かるうち、いつしか自分も、同じような物語を作って、たくさんの人々に見ていただきたいと思うようになりました。

それから長い間、自主映画を作ったり、世に出ることのない小説を書いたり、あるいは脚本家として映画やテレビ番組制作に携わったりと、自分にできる精一杯のことをやってきました。不遇の時代も経験しました。諦めずに続けてこられたのは、たくさんのお恩人や友人たちの励ましと、そして子供の頃から体に叩き込まれたエンターテインメントの力を信じた結果であるように思えます。

今後も気取ることなく、誠心誠意、低俗ではない娯楽作品を作り続けていこうと思っております。

「職人で結構」とは、映画監督岡本喜八の言葉です。

自分も、一流の娯楽職人を目指して頑張るつもりです。

今はただ、この本を手にとってくださった皆様方に、少しでも楽しんでいただければと祈るのみです。

# 13 階段／目次

序章

7

第一章 社会復帰

13

第二章 事件

51

第三章 調査

83

第四章 過去

146

第五章 証拠

225

第六章 被告人を死刑に処す

279

終章 二人がやったこと

328

江戸川乱歩賞の沿革及び本年度の選考経過

348

江戸川乱歩賞授賞リスト

349

第四十八回（平成十四年度）江戸川乱歩賞応募規定

351



装幀 多田和博  
装画 西口司郎＋オリオンプレス

# 13 階段

これで貴様は死刑だ！

——映画「天国と地獄」(監督 黒澤明)

## 序章

死神は、午前九時にやって来る。

樹原亮は一度だけ、その足音を聞いたことがある。

最初に耳にしたのは、鉄扉てつひを押し開ける重低音だった。その地響きのような空気の震動が止むと、舎房全体の雰囲気は一変していた。地獄への扉が開かれ、身じろぎすらも許されない真の恐怖が流れ込んで来たのだ。

やがて、静まり返った廊下を、一列縦隊の靴音が、予想を上回る人数とスピードで突き進んで来た。

止まらないでくれ！

ドアを見ることはできなかった。樹原は、独居房の中央に正座したまま、膝の上で震える指を

凝視していた。

頼むから止まらなくてくれ！

そう祈る間も、猛烈な尿意が下腹部に押し寄せてくる。

足音が近づくにつれ、樹原の両膝がガタガタと震え始めた。同時に、ねっとりとした汗に濡れた頭部が、意志の力に抗いながら、ゆっくりと床に向かって沈み込んで行く。

タイルを踏みしめる革靴の音はどんどん大きくなった。そしてついに部屋の前まで来た。その数秒間、樹原の体内にあるすべての血管は拡張され、破裂しそうな心臓から押し出された血液が、体毛の一本一本を揺るがせながら全身を駆けめぐった。

だが、足音は止まらなかった。

それは部屋の前を通り過ぎ、さらに九歩進んで不意に途絶えた。

自分は助かったのかと思う間もなく、視察口の開閉音に続き、独居房を開錠する金属音が聞こえてきた。空房を一つはさんだ、二つ隣のドアのようだ。

「一九〇番、石田」低い声が呼びかけた。

警備隊長の声か？

「お迎えた。出なさい」

「え？」聞き返した声は、意外にも頓狂な響きを含んでいた。「俺ですか？」

「そうだ。出房だ」

そこから急に辺りは静まり返ったが、沈黙は長くは続かなかった。まるで誰かが音量つまみを

ひねったかのように、突如として大音響が響きわたった。プラスチック製の食器が壁に当たって跳ね返る音、入り乱れる足音、さらにはそうした騒音をかき消す動物的な咆哮が——人間の声とは思われない絶叫が続いている。

やがて、放屁と脱糞のくぐもった音に続き、びちゃびちゃと水たまりを踏み荒らす不快な響きが聞こえてきた。そこにはなぜか、壊れたスピーカーががなり立てるような雑音が混ざっていた。

少しの間、樹原は音の正体を見極めようと耳を澄ました。やがて、そのガーガーという雑音の中に、かすかな呼吸音が混ざっているのに気づいて慄然とした。それは死の恐怖に堪えかねた人間が、食物や消化液を嘔吐している音なのだ。今、房内から連れ出されようとしている男の口からは、吐瀉物が物凄い勢いで噴出されているに違いない。

樹原は両手を口に押しつけ、必死に吐き気をこらえた。

しばらくして雑音が小さくなり、喘ぎ声と嗚咽だけが残った。しかしそれも、ふたたび進み始めた靴の響きと、重い荷物を引きずるような音とともに遠ざかって行った。

房内に静寂が戻ると、樹原はもはや、座っていることすらもできなくなつた。懲罰などはどうでもよかつた。彼は規律違反を承知で、前にのめるように畳の上に突っ伏した。

あの時のことを思い出すと、今でも寒気に襲われる。樹原が東京拘置所の死刑囚舎房、通称『ゼロ番区』に収監されてから三年後のことだ。あれからもう、四年近くの歳月が流れている。

その間、執行が止まっているのかどうかは分からなかった。あんな騒ぎは耳にしていないが、たまに廊下ですれ違う死刑囚の中に、顔を見なくなつた者がいるのも確かだ。

樹原は、百貨店の袋を貼る仕事の手を休め、房内を見回した。独居房の広さは三畳間にも満たない。流し台や便器のある板の間を除けば、生活空間はたつたの二畳だ。採光の悪い房内は、昼は蛍光灯、夜は十ワットの電球が点灯して、重監視下にある死刑囚を照らし続ける。その陰鬱な空間で、七年もの間、死の恐怖に怯えながら生きてきたのだ。

電車が通り過ぎるかすかな音に顔を上げる。彼はそつと立ち上がり、紐から吊された洗濯物をくぐつて窓辺に立つた。

引き戸式のガラス窓を開けても、鉄格子とプラスチックのフェンスに遮られて外の風景は見えない。それでも、フェンスの上の隙間からは曇り空がのぞき、頬には湿気を含んだ風を感じるこゝろができた。

次はいつなのか。

樹原は外気を吸いながら、決して慣れることのない不安に襲われていた。死神が、彼の房の前で立ち止まる日は近いのだろうか。

過去三度の再審請求と、その棄却に伴う即時抗告と特別抗告は、すべて斥けられていた。現在行なわれているのは、四度目の再審請求棄却に対する即時抗告だ。それは、希望の残滓を指でつまみ上げるような心もたない手続きだった。再審請求が四度目ともなると、どれだけ裁判資料をめぐつても、確定判決に合理的な疑いを生じさせ得る証拠は見つからなくなっているのだ。

自分は処刑されてしまうのか。

まったく身に覚えのない罪のために。

刑務官の足音を聞いたような気がして、樹原は座卓の前に戻った。今は午前十一時。「お迎えが来る時間ではない。少なくとも、明日の朝までの命は確保されているはずだった。」

樹原は請願作業を再開した。有名百貨店のロゴが入った紙を折りたたみ、糊で貼りつける。時給三十二円、月給に換算すると五千円ほどの仕事だ。それでも文房具や菓子、衣類などの自弁購入品を買いただけでした。

樹原は、手の動きと思考を切り離し、いつもの想像に耽ることにした。

どんな人間が、この買い物袋を使うのだろう。

それは、死の不安を少しでも和らげてくれる、ささやかな心理的トリックだった。

デパートの買い物客は、主婦を中心に女性が多いだろう。恋人へのプレゼントを入れる男性客もいるかも知れない。

袋を提げて売り場を歩く客の姿を想像するうち、樹原はふと手を止めた。

階段が心に浮かんだ。重い荷物を両手に、デパートの階段を上る客。その姿が、なぜか彼の心に引っかかった。眉をひそめ、心の中の映像に焦点を絞る。

客の背中。重い袋。一步一步上って行く足。

違う、と樹原は顔を上げた。

階段だ。



かすかな記憶が、脳裏に蘇ってきていた。

そうだ。あの時、自分は、階段を上っていた。今と同じように、死の恐怖に駆られながら、階段を上っていた。

それが想像の産物ではないことを確認しようと、樹原は必死に頭を振った。間違いなかった。あの時、自分は、階段を上っていたのだ。

樹原は立ち上がり、流し台の蓋を閉めた。それはそのまま机となった。横にある棚に手を伸ばし、ボールペンと便箋を取り出してから、椅子代わりの便器の上に座り込んだ。

彼が書こうとしているのは「願箋」<sup>がんせん</sup>だった。弁護士宛ての手紙を発信する場合も、いちいち許可を求めなくてはならないのだ。

おそらく特別発信は許可されるだろう。その内容も、検閲に引つかかることなく弁護士に届くと思われた。

もしかしたら、助かるかも知れない。

樹原の胸に希望が湧き上がった。それは死刑囚舎房に収監されてからの七年間、一度として感じたことのない強い光だった。

地獄の入口から、引き返すことができるかも知れない。

願箋を書き終えた樹原は、弁護士宛ての手紙に一心にペンを走らせ続けた。